

『歎異抄』第5条 ~追善回向を超えて~

【第5条・本文】

親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念佛申したこと、いまだ候はず。

5 そのゆゑは、一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり。

わがちからにてはげむ善にても候はばこそ、念佛を回向して父母をもたすけ候はめ。ただ自力をすべて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道・四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもつて、まづ有縁を度すべきなり
10 と〔云々〕。

【現代語訳】

親鸞は亡き父母の追善供養のために念佛したことは、かつて一度もありません。というのは、命あるものはすべてみな、これまで何度となく生れ変り死に変りしてきました中で、父母であり兄弟・姉妹であったのです。この世の命を終え、浄土に往生してただちに仏となり、どの人をもみな救わなければならないのです。念佛が自分の力で努める善でありますなら、その功德によって亡き父母を救いもしましようが、念佛はそのようなものではありません。

自力にとらわれた心を捨て、速やかに浄土に往生してさとりを開いたなら、迷いの世界にさまざまな生を受け、どのような苦しみにあろうとも、自由自在で不可思議なはたらきにより、なによりもまず縁のある人々を救うことができるのです。このように聖人は仰せになりました。

梯 實圓『大きな字の歎異抄』183頁

25 この条は、念佛を回向して、亡くなった父母を救おうとする孝養念佛とよばれる追善回向の念佛を否定された法語です。そしてその理由をあげて、まず第一には、父母を救うということは、実は一切の有情を救うという意味を持つのだから、とうてい凡夫としてできるわざではないといい、第二には、念佛は、私どもの一人ひとりが生死を超える道として、如来から賜った行であって、私が造った功德
30 ではないから、亡き人に施すというようなものではないといわれるのです。ほんとうに人を救うということは、まず自分が自力をすべて本願に帰し、浄土のさとりを完成した上でのことであると諭された法語です。如来が与えてくださった本願の念佛を信受して、浄土に往生し、すみやかにさとりを開くならば、たとえ有縁の人が、地獄・餓鬼・畜生といった苦海に沈んでいようとも救うてゆくことができるといわれるのです。

(1) 親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したこと、いまだ候はず。

親鸞は亡き父母の追善供養のために念仏したことは、かつて一度もありません。

追善供養の念仏…

5 故人に縁のある者が、迷いの境界にとどまる故人のために追って善事としての念仏を称え、仏の悟りに至らせること。

■浄土真宗における追善供養についての立場

⇒ 浄土真宗のお念仏や読経は亡き人への「追善供養」の行為ではない

10 ① 人々を迷いの境界から救済するという行為の不可能性
→ 「凡夫」の自覚

15 ② 念仏は自らが起こす善行ではなく、如来より賜った他力の行
⇒ 念仏は阿弥陀如来より私に回向された功德

このようなことから、親鸞聖人は念仏を追善供養の行為として行うことを否定。
しかし、浄土真宗で死者儀礼としての法事・法要を否定するということでは決してない。

20 『親鸞聖人御消息』第43通
「聖人（法然）の二十五日の御念仏も、詮ずるところは…」

25 ⇒ 「聖人の二十五日の御念仏」とは、法然聖人の月命日にあたる二十五日に集まって行う念佛会（仏事）のこと。

※法然聖人は建暦2（1212）年1月25日に往生

30 覚如上人の『拾遺古徳伝』には、親鸞聖人が晩年京都に戻られてから、法然聖人の臨終に立ち会えなかつたことを悔やみ、毎月二十五日の月命日に礼讚念佛をおこなつたと記述されている。

35 浄土真宗における仏事・法事は、故人を偲ばせていただくと共に、私を目当てとする阿弥陀如来の救いに出遇わせていただく「仏法聴聞」の場であり、念佛や読経は、この私を間違ひなくお救いくださる如来の広大なる仏恩を讃えていける「仏徳讚嘆」の姿である。

(2) そのゆゑは、一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり。

5 というのは、命あるものはすべてみな、これまで何度も生れ変わり死に変りしてきた中で、父母であり兄弟・姉妹であったのです。この世の命を終え、浄土に往生してただちに仏となり、どの人をもみな救わなければならないのです。

「一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり」

※万物と私との「いのち」の繋がり

10 山鳥の ほろほろと鳴く声きけば 父かとぞおもふ 母かとぞおもふ
(行基『玉葉和歌集』)

⇒ 救いの対象は、生きとし生けるあらゆる「いのち」へと広がっていく。

■宮沢賢治と『歎異抄』

15 賢治にとって良き理解者であり、最愛の妹トシが24歳で亡くなる※「永訣の朝」
賢治の生家は、200年来続く熱心な浄土真宗の門徒であり、賢治は5歳の時にはすでに「正信偈」や「白骨の御文章」を暗誦していた。

(松岡幹夫『宮沢賢治と法華経～日蓮と親鸞の狭間で～』)

16歳頃の書簡

20 「小生はすでに道を得候。歎異鈔の第一頁を以て小生の全信仰と致し候」

しかし、賢治は24歳で「国柱会」という『法華経』系の教団に入る。トシの葬儀は浄土真宗で勤められたが、賢治は反発して参列せず。賢治の苦悩は深まる…

25 『青森挽歌』※最後の一節

《みんなむかしからのきやうだいなのだから
けつしてひとりをいのつてはいけない》
ああ わたくしはけつしてさうしませんでした
あいつがなくなつてからあとのよるひる
わたくしはただの一どたりと
あいつだけがいいとこに行けばいいと
さういのりはしなかつたとおもひます



「この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり」

35 ⇒ 次の生にて浄土に往生して仏と成り、すべての「いのち」を救いとげていく。

(3) わがちからにてはげむ善にても候はばこそ、念佛を回向して父母をもたすけ候はめ。

念佛が自分の力で努める善でありますなら、その功德によって亡き父母を救いもしめしが、念佛はそのようなものではありません。

5

■追善回向

生者が善根を修め、その功德を亡者のあとを追って与えること。

一般には死後七日目ごとの中陰、百カ日や年忌などの法事は、亡者の苦を除き、冥福を祈る為の追善の場とする。 (ex. 追福・追修)

10

親鸞聖人が在世当時の仏教は、鎮護国家の仏教、追善の仏教。聖人はあるべき姿を失いつつあった仏教本来の姿を取り戻すべく、恩師・法然聖人より伝承された阿弥陀如来の本願念佛の救いを説き広めていかれた。

15

「回向」とは…

「回」はめぐらすこと、「向」は差し向けること。「回向」とは、自己の善行の功德を自身の菩提、または他者に差し向けること。浄土真宗の回向は、阿弥陀如来が名号（南無阿弥陀仏）を回向して、一切衆生を救済する如来の回向（本願力回向）。つまり浄土真宗における回向とは、阿弥陀如来の救いのはたらきであり、私たちが他の人に善根をふり向ける行為ではない。

20

供養とは…

「ブージャナー」の訳語で、「心から尊敬する」という意味。転じて、仏法僧の三宝に飲食・灯明・衣服などを寄進する意味でも用いられる。現在は死者儀礼としての「追善回向」「追善供養」としての意味が定着。

25

■浄土真宗の念佛は自力の行ではなく、如来より回向された他力の行

30

まづ自力と申すことは、行者のおののの縁にしたがひて、余の仏号を称念し、余の善根を修行して、わが身をたのみ、わがはからひのこころをもつて身口意のみだれごころをつくろひ、めでたうしなして浄土へ往生せんとおもふを自力と申すなり。 (『親鸞聖人御消息』)

⇒ 「自力」とは、往生成仏のために自分の行為を役立たせようとするこ

⇒ 本願への疑い

35

⇒ 自ら修めた善を、他の人々を救うためにふりむけることが追善供養 (=自力)

■浄土真宗の念佛は如来回向の行

「回向」は、本願の名号をもつて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。

(『一念多念文意』)

5 自力の行であれば、自分から他者への回向が可能。しかし、浄土真宗の念佛は功德を積むことのできない凡夫（私）のために、阿弥陀如来が自らの徳のすべてを名号（南無阿弥陀仏）に込めて、恵み与えてくださった如来回向の行である。

『仏説無量寿経』

10 令諸衆生 功徳成就（もろもろの衆生をして、功徳を成就せしむ）

名号（南無阿弥陀仏）には、私が浄土に往生し、成仏するために必要な功徳（智慧・慈悲）のすべてが込められている。名号は阿弥陀如来が万人に回向されている真実の行。浄土真宗の念佛は如来回向の行である本願の念佛、つまり如来の功德がすべて込められた名号をいただくことである。したがってこの念佛行は、私が他の人を救うための行為ではない。

(4) ただ自力をすべて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道・四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもつて、まづ有縁を度すべきなりと

20 自力にとらわれた心を捨て、速やかに浄土に往生してさとりを開いたなら、迷いの世界にさまざまな生を受け、どのような苦しみにあろうとも、自由自在で不可思議なはたらきにより、なによりもまず縁のある人々を救うことができるのです。

■六道・四生

迷いの世界と迷いの世界での生まれ方

六種の迷いの境界（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上）にあって、四生（①胎生…母胎から生まれる、②卵生…卵から生まれる、③湿生…湿気の中からわき出る、④化生…業力により忽然と変現して生まれる）の生まれ方が存在する。

■神通方便

35 自由自在で不可思議なはたらき（還相のはたらき）

往相 … 念仏する者となって、浄土に往生するすがた
還相 … 浄土で悟ると同時に、様々な形で利他活動するすがた

「正信念仏偈」

5 得至蓮華藏世界 即証真如法性身 遊煩惱林現神通 入生死園示應化

蓮華藏世界に至ることを得れば、すなはち真如法性の身を証せしむと。煩惱の林に遊んで神通を現じ、生死の園に入りて應化を示すといへり。

10 神通力をもって、たとえ世々生々の父母兄弟が、六道の迷いの境界にあって、四生というどんな生まれ方をして苦惱を受けていようとも、ことごとく救いとげていくことができる。

安樂浄土にいたるひと 五濁惡世にかへりては
釈迦牟尼仏のごとくにて 利益衆生はきはもなし (浄土和讃)

15

「神通方便をもつて、まづ有縁を度すべきなりと」

浄土に往生しさとりをひらけば、還相のはたらきによって、何よりもまず現生において縁の深かった人々を救うことができる。

20



いなぎせんえ (1917~2014)

本願寺派勸学、本願寺伝道院院長、八尾市光蓮寺住職などを歴任。

25

『御文章概要』 (百華苑、1983年)

30 仏教の行事、特に浄土真宗の仏事はすべて死者を無駄にしない為の行事である。主人を失い、愛児を失った場合、主人の死を無駄にしないこと、愛児の死を無駄にしないことがほんとうの主人や愛児に対する「おたむけ」である。この生きる答えのない人生に、ほんとうの生きる答えを見い出したならば、主人や愛児の死が永久に生かされることなる。この生死出づべき道こそ念仏の法である。(中略) 生き方を通して念仏申す身になることこそ、死者を永久に無駄にしない生き方である。